

# 留学報告書

2019年6月30日

ブラウン大学経済学部 三浦 憲

アメリカのロードアイランド州プロビデンスに位置するブラウン大学の経済学部博士課程に在籍しております三浦 憲と申します。専門分野は、開発経済学です。大変光栄なことに、1年間、船井情報科学振興財団の奨学生として支援していただけることになりました。私がブラウン大学に入学した年は2013年8月なので、すでに6年間の留学生活を送ってきたこととなります。本報告書では私の自己紹介も兼ねて、留学を志したきっかけ、研究内容およびこれまでの留學生生活を簡単にご紹介させていただきます。

## なぜ留学したか

ここでは私が留学を志した動機をお話ししたいと思います。出願結果や出願プロセスを通じた感想は私のホームページ上の[記事](#)に纏めてありますので、そちらもご笑覧いただければ幸いです。

私がアメリカおよびイギリスの経済学大学院に出願した時期は2012年12月頃であり、すでに7年前の話になってしまいます。当時、すでに日本の博士課程における在籍年月2年目も半分を過ぎようかという時期でしたので、一般的な留学のタイミングよりもだいぶ遅れての出願でした。「なぜ留学したか」という問いに対する短い回答は、他の経済学系の奨学生の皆さまがご指摘されている通り、(1)経済学の分野(特にデータを用いた実証研究)では最先端の研究を実施している研究者はアメリカとイギリスの大学に集中していること、また、(2)海外大学 PhD は非常に高く評価されること、という2点の理由により経済学分野では欧米での博士号取得が主流になっているため、というごくありふれた理由からでした。これに加えて、私の専門分野である開発経済学における将来のキャリアを考えると、少しでも早い段階から国際的な環境のもとに身を置き、英語の上達とともに勤労文化の違いなども肌で感じてみたい、と考えたためです。

卒業まで1年に迫った現在において、以上の動機を振り返って考えてみると、やはり留学を志した決断に全く後悔はありません。特に、アメリカの大学文化や社会のシステムは、日本のそれらと比べると様々な違いがあることを内側から感じる事が出来ます。また、学生の研究に取り組む姿勢も非常に真面目であるとともに、積極的に取り組んでいる印象です。ただし、彼らは効率的に仕事をこなしており、オンとオフを明確に線引きして研究生活を送っています。最後に英語についてですが、残念ながら、留学してから6年が経過しますが、いまだに非常に苦勞しています。しかし、こちらで生活したからこそ、または授業を担当したからこそ習得した英語表現は数知れず、英語に苦手意識を抱いていた私の高校や大学時代に比べるとこれでもかなり進歩したと言えます。

## 研究内容

私はこれまでサブサハラ・アフリカに位置するザンビア共和国の農村部で農民にインタビューして収集された家計調査データを用いて、(1) 天候ショック後の家畜売却行動のリスク対処策としての役割の評価、(2) 天候ショックへの対応策としての天候保険契約の需要規定要因の解明と天候保険契約の生産行動への影響の計測、(3) 農民の穀物収穫量の期待形成プロセスの検証、といった研究課題に取り組んできました。現在は、同じくザンビア共和国で収集されたデータを用いて、(4) 夫婦間の土地所有状況の違いが新作物の採用に与える影響、そして(5) 民族間結婚の動機とその帰結、といったテーマに取り組んでいます。途上国開発の現場に貢献できる研究を目指しています。

## 留學生活、とくに TA 業務について

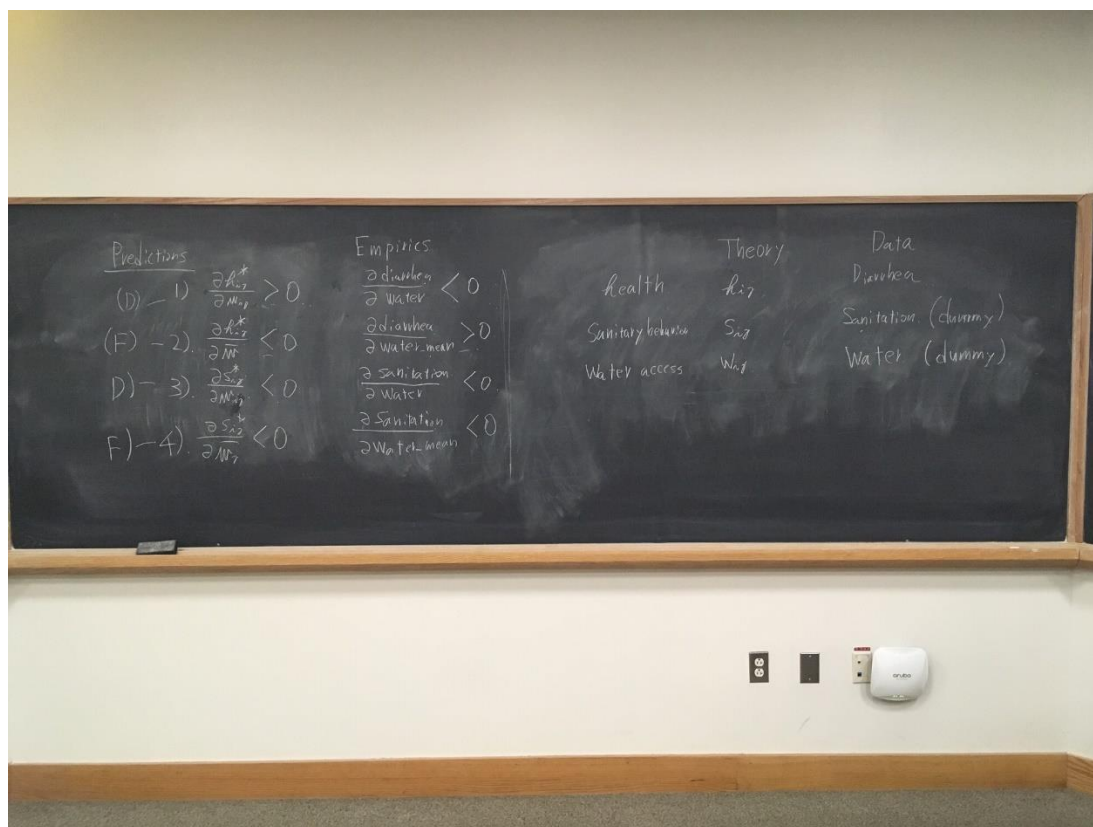
2018年9月から2019年5月にかけてティーチングアシスタント(TA)業務に従事する機会を得ましたので、この場を借りて、私の経験を共有させていただきたいと思います。

アメリカの大学院生は基本的に TA あるいは RA (リサーチアシスタント) として大学に雇用される形で給料(stipend)を得て生活しています。しかしながら、留学生、とくに大学院から留学を開始した学生が直面する最初の壁は、TA として勤務できる資格を判断する口頭試験に合格することです。大学にも依ると思いますが、学部教育が有名であるブラウン大学の要求水準は比較的高いのではないかと想像しています。ブラウン大学の場合、審査員の前での 15 分間の模擬講義が課され、それに合格しなければなりません。学部教育では学生とのインターアクション、双方向性が非常に重要視されますので、この模擬講義でも講義中に審査員から多くの質問を受けます。そのため、合格のカギは、いかに生徒からの質問に自然に対応できるか、という点にあります。また、こちらから生徒に質問を問いかけるなどの工夫もあるといいかと思えます。

晴れて模擬講義に合格し TA の資格を得ると、担当したい教授に連絡を取ります。担当科目は、自らの専門分野に近いほうが望ましいですが、授業が開講されないなどの理由により、セカンドベストを選択せざるを得ない学期も出てきます。学期が始まると、TA 業務を丁寧に消化していく日々が始まります。TA の役割は担当する教授や科目によって大きく異なりますが、私の基本的な業務は、(1)生徒が授業内容や宿題に関して質問ができるオフィスアワーの開設(一般的に、1週間に1.5-2時間)、(2)授業内容について補足したり生徒とともに課題に取り組む TA セッションの担当(週2回それぞれ1時間ずつ)、(3)課題の採点、(4)期末試験直前のレビューセッションの担当、および(4)期末試験の作成及び監督、でした。学部教育においても、膨大な宿題が課されるアメリカの大学における TA 業務は想像以上に時間を要します。特に、宿題提出前および期末試験前は、生徒からの質問(直接、あるいは、Emailによる質問)への対応にかなりの時間を割かなければなりません。期末試験が終わり、最終成績が担当教授によ

って提出される時期になると、TA は学生からの評価を受け取ります。ここでは数値化された指標とともに、生徒からコメントももらえます。この Student Evaluations は就職活動の際に提出が求められますので、非常に重要です。

もし TA のチャンスが転がっているならば留學生活の出来るだけ早い段階で挑戦してみることを強くお勧めします。確かに想像以上に時間が奪われますが、それ以上に得られるものが非常に大きいです。まず、学部の授業といえども、もし専門科目を担当できた場合、大学院生にとっても勉強になることが多く、新しい研究のヒントを与えてくれるかもしれません。また、授業の構成や講義内容と課題の関連など教授法の観点からも学ぶことが多いです。次に、TA セクションおよびオフィスアワーを通じて、英語力を向上させることが出来ます。特に、数式の言い回しや議論の進め方を効果的に身に付けることが期待されます。最後に、学部学生生活を垣間見ることができ、学部教育のシステムや学部生の考え方における日本との違いおよび利点について考える機会を得ることが出来ます。一般的に TA 業務に労力をかけすぎると、自らの研究時間が失われるという危険がありますが、学部学生の満足度が全米でもトップクラスであるブラウン大学の学部教育の一端に携わる経験ができ、個人的にはとても誇らしく感じています。



写真は、TA セクションの板書の一例。学部レベルの授業ですが、課題は理論から導出された仮説を実際のデータを用いて実証的に検証するという、非常に優れた構成です。